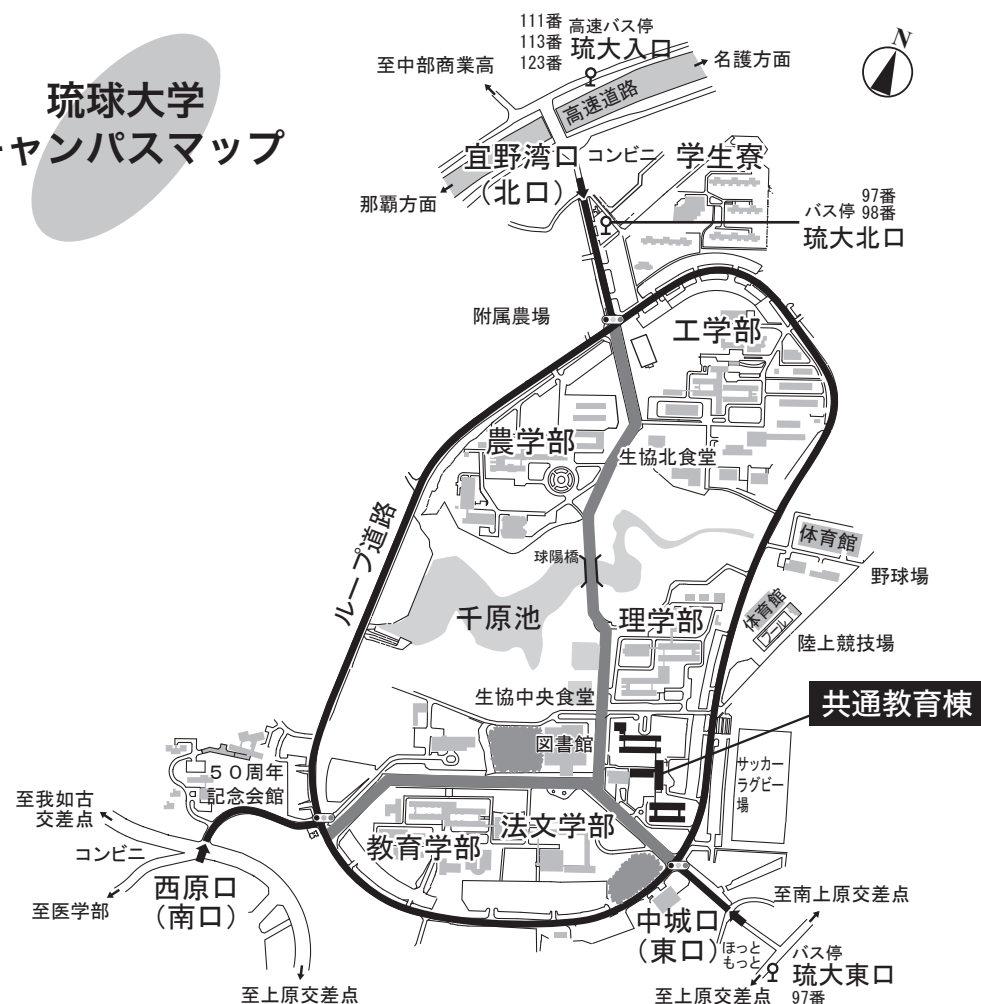


琉球大学 キャンパスマップ



日本イエイツ協会

第46回大会 プログラム

2010

9月25日(土) ~ 9月26日(日)

会場

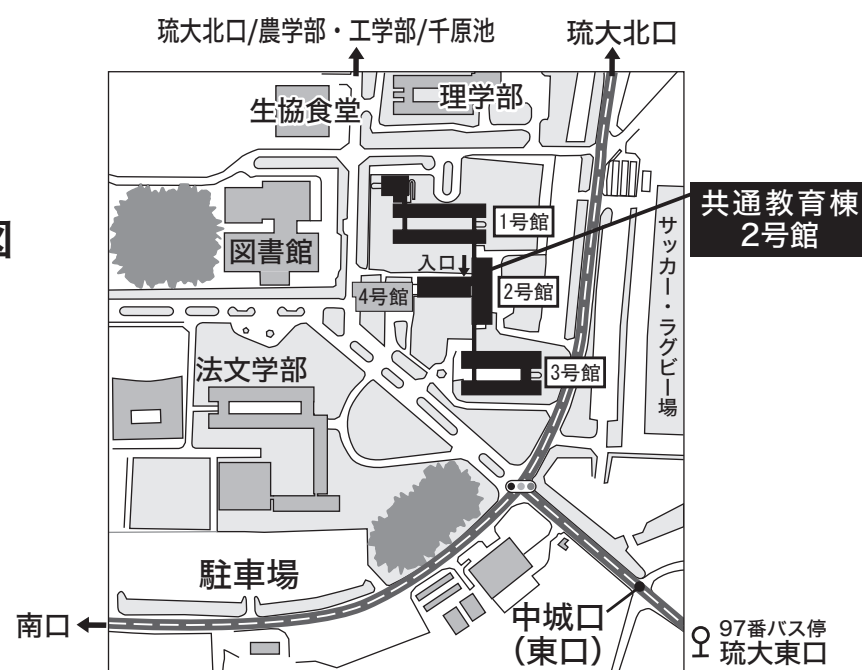
琉球大学共通教育棟2号館205号教室

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

千原キャンパス

TEL 098-895-8188

共通教育棟拡大図



日本イエイツ協会事務局

〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1
城西大学語学教育センター 小堀研究室内
TEL 049-271-7617 FAX 049-271-7983

9 月 25 日(土)		於 共通教育棟 2 号館 205 教室	
9:30～10:00		受付	
10:00～10:30		挨拶	日本イエイツ協会会長 琉球大学学長 アイルランド大使 松村 賢一 氏 岩政 輝男 氏 Brendan Scannell 氏 司会 小堀 隆司 氏
10:30～11:30		【講演】	魂の響き合いーアイルランドと沖縄 米須 興文 氏 (琉球大学名誉教授) 司会 風呂本武敏 氏
11:30～12:30		【研究発表】	ヒーニー・カントリーをめぐる詩作品 斎藤 徳彦 氏 ポップ・カルチャーの中の W.B.Yeats ー C.Eastwood と The Waterboys を例に 片岡由美子 氏 司会 及川 和夫 氏
12:30～13:30		昼食	
		総会	司会 鈴木 哲也 氏
13:30～14:30		【研究発表】	スライゴーへとつづく道 ‘The Ballad of Moll Magee’における土地性の問題について 宮本 大介 氏 『谷間の蔭』のジェンダー・ポリティックス 岩田 美喜 氏 司会 伊里 松俊 氏
14:40～17:30		【シンポジウム】	1930 年代のイエイツ ー <i>On the Boiler</i> におけるイエイツの危機意識を中心に ー 司会・構成 山崎 弘行 氏 萩原 眞一 氏 松田 誠思 氏
18:00～20:00		懇親会(会場 同棟 2 号館 100 教室)	司会 石川 隆士 氏

9 月 26 日(日)		於 共通教育棟 2 号館 205 教室	
10:30～12:00		【研究発表】	V. ワトキンズのイエイツ訪問と D. トマス 太田 直也 氏 W.B. イエイツの＜peacock-blue＞の世界 高橋 優季 氏 風の迷宮：死と再生の螺旋 石川 隆士 氏 司会 海老澤邦江 氏
12:00～13:00		昼食	
13:00～15:50		【ワークショップ】	アイルランドと沖縄の子守歌 ー 背景と構造をめぐって ー 構成・司会 松村 賢一 氏 菱川 英一 氏 (神戸大学教授) 新城 亘 氏 (沖縄三線音楽研究家)
16:00		閉会の辞	佐野 哲郎 氏

総会／委員会会場	同棟 3 号館	204 教室
講師控室	〃	205 教室

ヒーニー・カントリーをめぐる詩作品

齊藤 徳彦

シェイマス・ヒーニーはアイルランドを代表する詩人である。彼は北アイルランド出身であり、彼の詩をよりよく理解するためには彼の故郷を訪ねることがとても重要である。北アイルランドのヒーニーの故郷に近いマヘラフェルトでゲストハウスを営むユージン・キールト氏は、自らがヒーニーの熱心な読者であるだけでなく、ヒーニーの故郷付近で宿を営むという縁からヒーニーの故郷をガイドするヒーニー・カントリー・ツアーを企画している。ヒーニー・カントリー・ツアーは、ヒーニーの生まれ故郷をはじめとしたヒーニーの詩で描かれる場所を案内する。キールト氏は、そのスポット、スポットで車を停め関連した詩を紹介し読み上げ、説明を加えてくれる。ヒーニーの故郷ベラーヒやその周辺だけでなく、ヒーニーが青春時代を過ごしたベルファストまでも足を伸ばしてくれ、その料金、コースなどの希望は相談に乗ってくれる。またキールト氏が営む Laurel Villa Guest House は築200年くらいの3階建ての落ち着いた建物である。1階に入ると右手に食堂があり、そこには熱心なヒーニーファンであるキールト氏が集めたヒーニーの詩のポスターや詩集が展示されており、食事をしながらヒーニーの詩の世界を楽しむことができる。食事は奥さん自慢の手料理で、宿は「部屋も良し、食事も良し、キールト氏のもてなしも良し」といった星印をいくつも付けたいほどの宿である。このようにヒーニーを愛する人がヒーニーの故郷付近で宿を営み、ヒーニーを紹介する活動をしているということはアイルランド文学にとっても大変有益な文化活動であるといえるので、日本のアイルランド関係者にも是非知っていただきたい。また、北アイルランド訪問時はそのゲストハウスを是非利用していただきたいと考え、2007年8月に宿泊した時の経験からキールト氏の活動を紹介したい。

ポップ・カルチャーの中の W.B.Yeats —C. Eastwood と The Waterboys を例に

片岡 由美子

W.B.Yeats の作品が他の芸術領域に与えた影響は、イエイツが劇作家でもあったため特に舞台芸術において顕著であることは言うまでもない。彼の戯曲を土台とした能作品や詩作品とコラボレイトした舞踏パフォーマンスはイエイツ自身の生前した時代より創作されている。しかしながらポップ・カルチャーにおけるイエイツの作品の関わりについては、アカデミックな芸術作品との比較と違って、サブカルチャーの抱えるマスの評価視点の問題もあり研究対象としての困難さは否めない。

スライゴーで毎夏開催される Yeats International Summer School は、ゲスト・スピーカーとして近年、二人のノン・アカデミックなスピーカーの招聘を試みた。アメリカ人俳優であり映画監督のクリント・イーストウッドと、イギリスのカルト的ロック・グループ、ウォーターボーイズのリード・ヴォーカリスト、マイク・スコットである。一人は（彼の経歴にとって賢明なことに）招待を固辞し、一人は本年のサマー・スクールにおいて、注目のイベントの主となった。

クリント・イーストウッドはアイルランド系アメリカ人を自称するが、実際にはイングランド・アイルランド・スコットランド・ドイツの血を引くミックスである。しかしながら、映画人としてアイルランド系であると自認することが彼の演じる役柄や登場人物のキャラクター設定にとって大きな意味を持っていることは明らかである。一方、マイク・スコットはスコットランド、エジンバラの出身で、エジンバラ大学で英文学と哲学を専攻した経歴を持つソングライターであるが、その文学的素養が「孤高の吟遊詩人」との異名を得る作風に表れているのであろう。アイルランドに居を構え、アイリッシュ・ミュージックの影響を色濃く受けた作品を生み出した時期もある。

今回の発表では、研究ノート報告といった体裁にて、この二人が関係したイエイツ作品について、その扱われ方を俯瞰し、映画とポピュラー音楽という領域を例に、サブカルチャーにおけるイエイツ作品が持つ特徴の一面を切り取ってみたい。

スライゴーへとつづく道

‘The Ballad of Moll Magee’ における土地性の問題について

宮本 大介

今回の発表は、*Crossways* 所収の初期イエイツ詩「モル・マギィの唄」(‘The Ballad of Moll Magee’) における土地、というものに焦点を当ててみたい。すなわち、「地名なき土地性が、何を意味するか」である。すでに多くの研究者が指摘しているとおり、この時期のイエイツの特徴の一つは、アイルランド口承文化の伝統を思わせるバラッドへの傾倒である。‘The Ballad of …’ というシンプルな題名に、アイルランド地方の方言や地名を多用しているのがその特徴だが、この「モル・マギィの唄」においては、詩中の生々しく色濃い地方性の描写に比して、地名への言及がが少ない。彼女の目に映る情景を語り手である老女は子細に語る。しかし言及される地名は彼女の郷里だという Kinsale のみであって、しかもその土地の風景は語られてはいない。ただひたすらにその身の悲劇と彼女が今佇んでいる土地の風景を子供たちに向かって語りかけているのである。ジェファーズの注釈によれば、この詩は若きイエイツが Howth に住んでいた頃に、そこの教会の説教を聞いて、その内容にヒントを得て創作したということになっている。このダブリン近郊の漁師町は、詩人の生活者としての記憶を宿す場所であり、またその土地の民衆と母スーザンとの民話のやりとりの中に、ホメロスやダンテがなしえた世界描写の偉大さを垣間見た場所であるという、重層的な意味を持つ場所なのである。前期イエイツの理想化されたアイルランドの地方像は、シェイマス・ヒーニーも言うように Sligo という地名に集約されると言ってよく、民俗関係著作や自伝などを通してイエイツの風景描写に慣れ親しんだ読者にとって、このモル・マギィの語る土地は、断りさえなければ容易に Sligo の描写であると解されうる。その点でこの詩は前期イエイツが後に完成させる聖地 Sligo の青写真であるといえるだろう。

『谷間の蔭』のジェンダー・ポリティックス

岩田 美喜

J. M. シング『谷間の蔭』(1903)は、『西国の伊達男』(1907)と並び、初演時にアイルランド女性表象に関する議論を巻き起こした作品だ。例えばアーサー・グリフィスは、放浪者とともに家を捨てて出て行くようなノラは「アイルランド女性ではない」と述べ、激しい嫌悪感を見せたし、モード・ゴンもまた否認の示威行動として観劇を拒否した。だが興味深いことに、『谷間の蔭』は、ゴンが前年に主役を務め、ナショナリストたちの快哉を浴びた『キャスリーン・ニ・フーリハン』とのダブル・ビルで上演されたのだ。

理想化／象徴化されたキャスリーンと、ウィクロウ峡谷の霧や孤独、夫に抑圧されるノラは対照的である。前者で機能している〈祖国＝女神〉のジェンダー・ポリティックスは、同時上演された『谷間の蔭』とはどのような関係を持っていた(あるいは持っていなかった)のだろうか。本発表では、『谷間の蔭』のテキストと上演時の歴史的／文化的背景をともに分析し、シング劇でしばしば問題になるジェンダーの問題に新たな一面を加えたい。

シンポジウム

1930年代のイエイツ

—*On the Boiler*におけるイエイツの危機意識を中心に—

司会・構成 山崎 弘行

従来、1930年代におけるイエイツの思想傾向については、大別すると、次のような三つの理由で批判がなされてきた。(1) 民主主義から逸脱してファシズムに傾斜している。(2) プロテスタント支配体制の文化を偏重するあまり、カトリック系アイルランド人(すなわち大多数のアイルランド国民)に対して敵対的である。(3) フランス革命以来の理念である、自由、平等、博愛という進歩主義的な啓蒙主義思想を尊重せず反動的である。本シンポジウムは、これらの批判の妥当性を検討することを目指して、主として*On the Boiler* (1938)に色濃く反映している1930年代におけるイエイツの危機意識の特質と意義を次のような4つの角度から考察したい。

- (1) *On the Boiler*にみられるイエイツの優生学にたいする態度と、同書に収録されている数編の詩と詩劇*Purgatory*における態度を主として両者の異同に重点を置きながら比較検討する。＜萩原担当＞
- (2) 1930年代に台頭したファシズムとコミュニズムについてのイエイツの発言を精神的危機の克服という視点から読み直しながら、「1930年代詩人」を代表するオーデンのイエイツ観の意義を検討する。＜山崎担当＞
- (3) 同時代の代表的なヨーロッパ文明論(ヴァレリーの「精神の危機」(1919)等、あるいはオルテガの『大衆の反逆』(1930)等)に見られる危機意識とイエイツのそれを、主として異質性

と同質性に重点を置きながら比較検討する。＜松田担当＞

- (4) アイルランド自由国における政治的文化的な背景、特に“The Censorship of Publications Act” (1929 年) (「出版物検閲法」) を成立させて、猥褻出版物などの検閲に乗り出したカトリック支配体制とイエイツの危機意識との関連性をパネリスト全員がそれぞれの角度から論じる。

“the best bred from the best” — Yeats と優生学

萩原 真一

Yeats は、*On the Boiler* の “To-morrow's Revolution” と題する章の中で、「我々の世代は汚染されている」「ヨーロッパ主要国は心身共に退化しつつある」という「危機」意識を表明し、こうした人種の「汚染」や「退化」を阻止する手段として、少なくとも草稿段階では「不適者の断種」を肯定している。「汚染」「退化」「不適者」「断種」といった語彙は、当然のことながら、1930 年代当時、支配的なパラダイムのひとつであった優生学の言説の枠組みの中で捉えなければならないであろう。現に Yeats は自注において、“To-morrow's Revolution” で言及する事実の大半および「隠喩」の一部が、優生学の信奉者 Raymond Cattell の *The Fight for Our National Intelligence* に依拠していることを明らかにしている。

優生学は、周知のように、Charles Darwin の従弟 Francis Galton が 1883 年に創設した（疑似）科学である。Galton は、生物界における弱肉強食と適者生存の原則を人間界に応用する社会進化論の影響を受け、優生学が人間の生得的な特質を最大限に活かす諸力を扱う学問であると定義した。一口に優生学といっても一様ではなく、通常、2 つに大別される。ひとつは、結婚を手段として適者の人為的な保存・増加を重視する「正の優生学」、もうひとつは、断種と中絶を武器として犯罪者、アル中、狂人などの社会的な不適者の排除・抹殺を提唱する「負の優生学」である。手段は異なるものの、目標はただひとつ、人種の改良であった。なぜ人種の改良が声高に叫ばれたかという点、それはひとえに、19 世紀末以降、人種の「退化」や「墮落」の意識が英国全体に蔓延していたからである。20 世紀に入ってから、優生学の運動は隆盛に向かい、1912 年にロンドンで開催された国際優生学大会を経て、1920 年代・30 年代に至ると、英国のみならず他の先進諸国においても最高潮を迎えたのである。

Yeats と優生学を巡っては、これまでも優れた先行研究がある。例えば、David Bradshaw は、*On the Boiler* の成立と 1930 年代の英国優生学協会の活動との関係を、未公開資料を博捜しながら丹念に辿っている。あるいは *Modernism and Eugenics* の著者 Donald J. Childs は、優生学に対する Yeats の関心が早くも 20 世紀初頭において芽生え、最晩年の 30 年代末に至るまで終始一貫して持続していることを論証している。両者は、いつ頃から Yeats が優生学に興味を抱き始めたのかに関して、異なる見解を有しているものの、最終的な結論では一致している。すなわち、Bradshaw は「優生学的にいつて、Yeats は奇矯な反動家のひとりである」と論難し、Childs は「20 世紀文学の歴史において、自らを最後のロマン派のひとりと呼んだ詩人が、Woolf と Eliot と同様、最初の優生学

推進論者のひとりでもあったことを、我々は認めなければならない」と結論づけているからである。しかし、Yeats を単に「反動家」「優生学推進論者」と決めつけただけでは、齟齬をきたすのではなかろうか。詩人の言動や作品の言葉尻を捕まえて一方的に断罪しても、文学研究としてはあまり生産的ではないからである。かといって Yeats の「負の優生学」的な言辞を等閑視することもできないであろう。そこで本発表では、作品が自立した小世界であるという考え方を避けた上で、*On the Boiler* を初めとする 1930 年代の Yeats 作品を、あくまでも同時代の社会的・文化的言説との関係において、批評的に確定することを目指したい。具体的には以下の通りである。

- (1) *On the Boiler* と 1930 年代の優生学の動向を、Yeats が警鐘するルネサンス以降の「人間精神」(“the human mind”) の「無機」(“inorganic”) 化を視野に収めながら、検証する。
- (2) *Purgatory* と *The Herne's Egg*、そして幾つかの詩作品 (例えば ‘Under Ben Bulbin’) を、優生学的な意味合いを持つ “breeding” という「隠喩」／イメージに着目して読み直す。

1930 年代のイエイツの危機意識と有機的な精神

山崎 弘行

On the Boiler が書かれたのは、1929 年に始まった大恐慌を背景に左右両翼の全体主義 (ファシズムとコミニズム) が台頭して民主主義と覇を競い、経済的、軍事的な危機意識が世界中に高まっていた時代であった。しかし、本書に表明されているイエイツの危機意識は、経済的なものでも軍事的なものでもない。それは明らかに精神的な危機意識である。*On the Boiler* の “Private Thoughts” と題する章の結末でイエイツは精神の無機化の傾向が強まる現代のヨーロッパに精神の危機を見出している。このような傾向が出現したのは、かならずしも 20 世紀になってからではなく、ルネッサンス以後であるという。イエイツがルネッサンスを嫌悪するのはそのせいなのである。しかし、イエイツはルネッサンスを全面的に嫌悪しているわけではない。それが「形式を理解しやすくして自由を創造した」という理由で礼讃してもいる。ルネッサンスに起因する有機的な精神の喪失を嘆きながらも、あくまでも明確な形式と精神の自由だけは手放そうとはしていないのである。本発表では、以下のような論点を検討することにより、1930 年代のイエイツの危機意識の中核が有機的な精神の衰退をめぐるものであったことを裏付け、そこに窺える主体の二重性を重視するイエイツの姿勢のもつ現代的な意義を考察したい。

- (1) イエイツが優生学に興味を抱いた根本的な理由
- (2) イエイツがファシズムとコミニズムを批判した根拠
- (3) オーデンによるイエイツ非難論と弁護論の妥当性
- (4) イエイツの出版物検閲法批判の論拠
- (5) 1930 年代のイエイツの詩学、歴史観、および人間観と有機的な精神との関連性

イエイツ思想の反時代性―〈近代〉への挑戦

松田 誠思

第一次大戦の前後から 1930 年代にかけて、主としてアイルランドの政治的・社会的現実と、アイルランドを含むヨーロッパ文明の歴史の動きに対するイエイツの認識は、大別して二つの特色を示している。一つは、対英抗争と内乱の曲折をへて成立した「アイルランド自由国」を、基本的に支持する立場をとりながら、民主制という政治制度そのものにたいする異議申し立てを機会あるごとに表明し、カトリック主導の政治運営とそれによって台頭した中産階級の世俗的価値観を批判して、「反時代的」姿勢を鮮明に打ち出していること。もう一つは、*A Vision* に詳述され、‘The Second Coming’、‘The Gyres’ などに示されているように、約 2000 年の周期で正反対の文明が交替するという循環史観にもとづき、現代社会の物心両面にわたる混乱を、文明の交替期特有の表れとして巨視的に捉えていること。

これらはいずれもかなり主観性の強い認識であり、事実に照らして検証し得ないものを多分に含んでいて、必ずしも説得的であるとは言えないけれども、イエイツ最晩年の詩作・劇作活動のなめになっているだけでなく、*On the Boiler* で開陳される現代社会と人間の墮落・生命感の衰退にたいする危機感、及び「荒療治」の提案と密接に結びついている。そこでイエイツのこのような認識の妥当性と問題点を明らかにする手掛かりとして、同時代のすぐれた文明批評家ポール・ヴァレリー (Paul Valéry 1871-1945) とオルテガ・イ・ガセット (Ortega y Gasset 1883-1955) が、第一次大戦後のヨーロッパ社会と文明の状況を的確に分析し素描した論考を紹介し、三者の歴史観を比較するとともに、〈ヨーロッパ的なもの〉〈貴族的なもの〉と大衆的なもの〉〈精神と文明〉〈近代性〉など、彼らが「生の現実」を表象するために用いた鍵概念の内容を検討する。主な参考資料は以下の通り。

- (1) イエイツ (‘The Statues’, ‘A Bronze Head’, *Purgatory*, *The Words upon the Window Pane*, *The Death of Cuchulain*, *A Vision*, *On the Boiler*, etc.)
- (2) ヴァレリー (「方法的制覇―独逸の制覇」, 「精神の危機」, 「ヨーロッパ人」, 「知力の危機について」, 「精神の政治学」, 「ヨーロッパの盛衰に関する覚書」 など)
- (3) オルテガ (『大衆の反逆』, 「危機の本質―ガリレイをめぐる」, 「体系としての歴史」, 「世界史の一解釈」 など)

V. ワトキンズのイエイツ訪問と D. トマス

太田 直也

ウェールズの詩人ヴァーノン・ワトキンズは、1938年にダブリンを訪れ、念願であったイエイツとの面会を果たした。その時にワトキンズが何を問い、イエイツの口から何が語られたのかについて、詳細な記録は残っていない。また、イエイツとの面会の後、ワトキンズはディラン・トマスを訪ねているが、二人の間に交わされた会話についても伝記等には何も記されていない。しかし、「20世紀最大の詩人の一人」としてイエイツに敬意を抱いていたトマスに対して、ワトキンズが敬愛するイエイツの様子を語ったであろうことは想像に難くない。

イエイツとの面会が自らにとって意義深いものであったかを示すように、後にワトキンズはイエイツに関して数篇の詩を著した。特に“Yeats in Dublin – In Memory of W. B. Yeats”と題した一篇には、詩のありようや詩作態度に関してのイエイツの言葉が、時には若い詩人たちへの助言として、また時には自らの回想として、断片的に記されている。

ワトキンズの作品中、ウェールズの若い詩人たちの作品を読んだとイエイツは語っている（ワトキンズはイエイツにウェールズの詩人たちの詩が掲載された紙誌を送っている）が、その中には、当然、トマスの詩も含まれていたであろう。実際、“‘The young poets,’ he [Yeats] murmured / ‘Toil too much. They lay / Something on their table, / And dissect, and wear it away / Till nothing but the grit is left.’” というイエイツの言葉は、執拗なまでに語の選択や作品の改訂にこだわり続けたトマスを想起させずにはおかない。勿論、それは前行の‘An image stands on Carmarthen sands / With the black birds overhead.’がトマスの“Especially when the October wind”で歌われている情景に酷似しているためでもある。では、仮にワトキンズから聞いていたとしたならば、イエイツのこのような言葉はトマスにはどのように響いたのであろうか。

ワトキンズのイエイツ訪問の年の暮れに、トマスは“Once it was colour of saying”と題した短い詩を書いた。この作品はトマスの詩のスタイルに変化が見られるものであり、彼にとっては詩人としてのターニングポイントとなったとも言えるものである。ここで彼はそれまでの自らの詩を否定し、詩人として言葉との内的な格闘をいかに展開すべきか、またそれが外的現実と向き合う自らにいかなる影響を与えるのかを歌っている。この詩に先立つ1934年、トマスは従前の詩に見られる言葉や技巧を捨て去り、新たな詩を書きたいという想いを“Especially when the October wind”において明らかにしている。しかし、そこには自らの内と外との関係を歌っているという共通点はあるものの、“Once it was colour of saying”ほどには現実に視線が向けられていないし、自らの詩的スタイルの変化までは見せていないのである。イエイツの“A Coat”を思わせる“Once it was colour of saying”が1938年に著されたのは、まったくの偶然だったのであろうか。

本発表においては、ワトキンズから伝え聞いたであろうイエイツの言葉が、トマスにいかなる影響を与えたのかについて、ワトキンズの作品を参照しつつ考察を試みたい。

W.B. イェイツの＜ peacock-blue ＞の世界

高橋 優季

W.B. イェイツが用いたモチーフに、孔雀とその色彩がある。『錬金術の薔薇』には、緑、青、金の色彩がまぼろしのごとく立ち現れ、孔雀が羽根を広げたかのように変幻して広がる描写がある。また、イェイツの創意に基づいて設けられたアビー劇場の一面の＜ Peacock Theatre ＞にも、孔雀の描写に通じる同様の色調が使われた。だが、この重要な色彩の意味を明確に理解することは、意外に難しい。

イェイツが重要な意味を込めたと感じられる、孔雀とその色彩感覚は、詩人の中でどのように形成されたのだろうか。イェイツが 10 代から 20 代に居住した Bedford Park が、その手がかりの一つとなる。多くの研究者が指摘しているように、Bedford Park において若いイェイツは W. Morris から芸術家たちと交流した。その経験はイェイツの美意識の形成に大きな影響を与え、後の文芸創作に多大なインスピレーションとなり続けた。当時この地で交流した人々の服飾の趣味や建築装飾を、イェイツは＜ peacock-blue ＞と表現するのである。そして同時期の Arts and Crafts においてよく知られる、Morris の壁紙や William De Morgan のタイルに多用されたのは、実際に青や緑の顔料だった。イェイツの自叙伝からは、＜ peacock-blue ＞に特徴付けられるこれらの装飾芸術に対する、Bedford Park 居住時代のイェイツの憧憬が伝わってくる。

一方キリスト教の伝承において孔雀は日輪を象徴することから、不死や復活のシンボルでもある。中世アイルランドの神学者スコトゥス・エリウゲナは、聖書の意味の無限性を孔雀の羽の色合いに例えた。ギリシア・ローマ神話でも、孔雀は「ヘラの鳥」と呼ばれ太陽のシンボルとされており、錬金術関連の用語としても、孔雀は錬金炉の寓意動物の一つであった。孔雀の羽根のもつ象徴的で錬金術的な意味作用をめぐる知識と、自らの美意識の形成にも根ざした色彩そのものへの深い憧憬とが、イェイツの中で孔雀とその色彩の表象を特権化していったのではないか。だからこそ、自身の作品の中に再三孔雀のモチーフを登場させ、そこに独自の色彩世界を展開し、イェイツ独特の意味を生み出そうとしたのではないだろうか。

本発表では、以上の推測に基き、イェイツの作品に見られる孔雀とその色彩のモチーフについて、詩人伝記と同時代の装飾芸術との関連と合わせ、一つの読み解き方を探り出すことを試みたい。

風の迷宮：死と再生の螺旋

石川 隆士

本発表は、イエイツの「もうひとつの螺旋」を、“Nineteen Hundred and Nineteen”における、“labyrinth of the wind”の修辞の中に考察することを目的とする。

“The Second Coming”が典型的に示している通り、螺旋はイエイツの後期作品における中心的修辞である。しかし厳密に言えば、彼の詩的表現の基盤となる彼の神秘主義的思想の源シンボルは、二つの交差する螺旋錘である。例えば、“The Second Coming”で表現される螺旋錘は表面的には単独のものでしかなく、他方の螺旋の存在が問われなければならない。

イエイツの二重螺旋錘の特徴は、互いに反作用する要素間の緊張関係にある。“The Second Coming”をそのまま引き合いに出せば、統御を失いつつ展開されていく“widening gyre”の対立項として、胡乱なる存在感を主張する“rough beast”が指摘できよう。つまり、二重螺旋錘の持つ緊張関係を基盤とすれば、その“rough beast”を現出せしめる見えざる力としての、もう一方の螺旋を想定することができるのである。

この見えざる螺旋は、逆巻く風として“Nineteen Hundred and Nineteen”の喧騒の中にその姿を隠顕させる。その最も明確な修辞が“labyrinth of the wind”である。というのも、神話学者カール・ケーレニイに寄れば、迷宮の原義は螺旋という形象そのものから導き出されるものであり、迷宮と螺旋は不可分といえるからである。この“labyrinth of the wind”は同詩篇において、隠遁者が自ら創りだす迷宮と対を成す。この二つの迷宮において、生成と解体という緊張関係が成立していることは明らかであり、本論では、その一方を成す、見えざる螺旋の表象としての“labyrinth of the wind”を考察したい。

ワークショップ

アイルランドと沖縄の子守歌

—— 背景と構造をめぐって ——

構成・司会 松村 賢一

子守歌には岸边に寄せる波音のように何となしになつかしさを誘う響きがあり、その調べは何時かしら体にしみ込んだふるさのような独特の感情を呼びさます。子守歌は曲や言葉の変化を伴いながらも広く伝播していったが、口承のもつ生命力を今更ながら考えさせられる。

日本の子守歌は、行智の『童謡古謡』（1820）にみられるように、従来「わらべうた」に分類され、さらに機能上から〈寝させ歌〉〈遊ばせ歌〉〈目ざめ歌〉に分かれている。イギリスでも“lullaby”は「わらべうた」（nursery rhymes）に分類されているが、題材によって分けられることが多い。

興味深いのは、*Lullabies of the Four Nations: A Coronal of Song with Renderings from the Welsh and the Gaelic*（1915）の序文で、編者のアデレード・ゴセットがアイルランドの子守歌“Sweet babe, a

golden cradle holds thee”（エドワード・ウォルシュ訳）の1節を引用して絶賛していることである。同じ初行で歌われる別のヴァージョン（The Fairies’ Lullaby）があり、これは“The Fairy Nurse”（ウォルシュ訳）としてW. B. イェイツの*Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry*（1888）に収められている。菱川氏は、“The Fairy Nurse”の原語でもある“A BheanÚdThíos”の背景と構造をめぐって音を奏で、語る。

子守歌は誰が歌ったのだろうか。イギリスやアイルランドでは母親や乳母（nurse）のようだが、日本では「勤めしやうとも子守はいやよ お主にや叱られ子にやせがまれて 間に無き名をたてらるゝ」（『山家鳥虫歌』）のように、江戸時代以来守り子が歌ったようである。なかでも、貧しい家の子は子守り奉公に出され、「五木の子守唄」のように苦しみや嘆きの子守歌を歌った。一方、沖縄はどうであったか。真心の奉仕として「娘たちは、たくさんの子供をお守りするのが誇り」（宮城文『八重山生活誌』）ということで、様相を異にする。新城氏は、沖縄本島、宮古・八重山地方の子守歌の背景や特性について三線を弾きながら語る。

このワークショップではアイルランドと沖縄の子守歌にさまざまな光をあてて考えてみたい。

子守唄が宿す物語——‘A BheanÚdThíos’

菱川 英一（神戸大学教授）

アイルランド人の対妖精戦略は、その一貫性からしてある種の情報戦とも形容しうる。そのアイルランド人の心性の一端は、妖精譚について語りのジャンルとして表向き「迷信」（‘pisreoga’）と分類しながらも、「妖精」（‘sióga’や‘sluasi’）と名指さず「善き人びと」（‘daoine maith’）と鄭重に言及するところにも窺える。この傾向は他でも見られる。アイルランド語は天体を指す固有のことばをすべて失ったといわれる。例えば、〈月〉を表す固有名詞—恐らくは神または女神の名—は失われ、今日‘gealach’（輝き）と称する。直接の言及が憚られるもの（畏れ多いもの、危害や不都合が予見されるものなど）への言及を修正する必要乃至心の働きが存したのであろう。かかる婉曲表現でなく逆のことを云い、判る人だけに判る符牒とする場合もある。よい例が末子を〈老人〉と云うマスケリー〔アイルランド南部コーク県のアイルランド語使用地域〕の子守唄である。この例は、畏怖すべき対象（＝子の誘拐を行う妖精）そのものでなくその対象から悪さを受ける可能性があるもの（＝末子）を隠蔽する点で特異であると同時に戦術として高度である。妖精に用心する心得はかくして幼少時からたたきこまれ、一旦自らがあちら側に連れ去られたならば救出要請を人間界に伝える工夫に細心の注意を要するは自明となる。その種の例として今日まで歌われその文脈が詞書として附随する子守唄‘A BheanÚdThíos’《そちらの婦人よ》を取り上げて考えてみたい。文献に初めて記録されるのは19世紀中葉のことであるがそれから百年以上も歌い継がれ21世紀に至る。

沖縄の子守歌

新城 亘（沖縄三線音楽研究家）

子守歌のことを、沖縄本島では「クワームイウた」、宮古地方では「ファムリ・アーグ」、八重山地方では「ファムリウた」と呼んでいる。これらの歌は、同じ沖縄諸島でありながら、風土や歴史、社会的な環境の違いの中で誕生しており、それぞれの特色をもって歌われている。

沖縄の子守歌には、寝つかせるための歌と、遊ばせるための歌、あるいは子守者自身が楽しみながら歌うというものもある。歌の内容は、子供への純粋な愛情を歌っているもの、自然や大人の社会を歌っているもの、中には、時の為政者を批判した歌もあるが、総じてやさしくて大らかである。

地域によっては、親の代わりに「守姉（ムリアニ）」がおり、守姉になった少女はこれを誇りに思い、母親がわりとして大切に子供の面倒をみた。守姉は、育てた子から終生尊敬されたが、このような守姉の歌った歌は、現在も好まれてよく歌われている。

日本本土の子守歌には、封建制度における身分差別を恨む歌や、子守奉公として売られてきた境遇の辛さを歌ったりしたものが多いが、沖縄の子守歌にはそのような歌はみられない。とはいえ、子守歌は、生活の豊かさよりも、むしろ貧困の中から歌い継がれてきたように思う。

このように、沖縄の自然の美しさや、共同体の絆の強さ、そして先祖から受け継がれた音楽的特性などにより、素朴ながらも味わいのある沖縄の子守歌が生まれたのだと考えられる。

今回の発表では、脅かしながら寝つかせる沖縄本島首里の《耳切り坊主》や、愛情をいっぱいにそそいだ宮古地方の《子守アヤグ》、そして、八重山地方の、昼の子守歌《あがろうざ》、夜の子守歌《月ぬ美しや（カイシャ）》などを歌う。

音階的には、沖縄本島を中心とした歌は琉球音階が使われ、宮古・八重山地方の歌は、本土で聴かれる律音階が多く使われている。これらの子守歌を三線で弾き比べながら、沖縄の子守歌の背景や特性について考えてみたい。

MEMO

日本イエイツ協会

第 46 回大会

要 旨